

四国遍路による人格形成

大賀 睦 夫

はじめに

筆者は、遍路体験記から四国遍路の実態を明らかにするという研究課題を設定し、前著において遍路体験記のリストを作成し、そのタイトル分析を試みた。⁽¹⁾ 本稿では、研究をさらに一歩進め、リストにあげた遍路体験記のすべてに可能な限り目を通し、そこに書かれている内容面から遍路の実態を分析することにした。

本稿の問題関心は、遍路の実践がお遍路さんにどのような影響を与えるかである。四国遍路は「お四国病院」であり、「お四国大学」であると言われるが、⁽²⁾ 実際に、遍路はどのように病んだ人を癒したり、未熟な人間を成熟した人間へと成長させるのか、それを遍路体験記の記述によって検証してみたいと思う。同様のテーマで、筆者はすでに「四国遍路の再生プロセス」を書いているが、⁽³⁾ これは成長の段階に着目して遍路を考察したものであった。本稿はこれとは別の視点から遍路における人格形成を見ようとするものである。

一般にわれわれが求める理想の人間像は、通俗的な言い方をすれば、強さとやさしさを兼ね備えた人間といえるであろう。男らしさと女性らしさを両方もつということである。ユングの中心思想のひとつは「人格形成は男性性と女性性の統合」である。そして、湯浅泰雄が指摘するように、それは長い伝統のある考え方で、ユングに限らず、易経の太極図、太乙金華宗旨の坎離交媾、チベッ

(1) 大賀睦夫「四国遍路体験記のリスト作成とタイトル分析」『香川大学経済論叢』第89巻第4号、2017。

(2) 辰野和男『四国遍路』岩波書店、2001、16ページ。

(3) 大賀睦夫「四国遍路の再生プロセス」『香川大学経済論叢』第87巻第3・4号、2015。

ト仏教の男女両尊，密教曼荼羅の金剛手院と観音院，錬金術の両性具有など，古くから洋の東西を問わず，男性原理と女性原理の統合が人格形成の目標にされてきたのである⁽⁴⁾。遍路についても，修行の遍路，癒しの遍路の両面が語られるという実情がある。そこで本稿ではこのような男性性・女性性という視点から遍路体験記の内容を考察してみようと思う。

1. 男性性と女性性について

前著でも触れたが，「人格形成は男性性と女性性の統合」を取り上げる理由は，遍路体験記には男性原理と女性原理への言及がしばしばなされるからである。たとえば，ある人は，遍路はきびしい修行の世界であるといい，また別の人は，出会いとお接待の慈悲に満ちた世界だという。遍路体験記のタイトルを見ると，『男は遍路に立ち向かえー歩き遍路四十二日間の挑戦』『激闘歩き遍路体験記』『四国巡礼葛藤記－駆け出し僧侶が歩いた四国八十八カ所』などの男性的タイトルがあり，他方，『四国遍路体験記－大悲の御手に抱かれて』『四国八十八ヶ所遍路－ふれあいの旅路』『お遍路に咲く花通る風』などの女性的タイトルがある。

このように遍路について，男性的，女性的両極のイメージがある。そしてそのいずれもが遍路の一面をとらえているように思われる。話をやや先取りしていえば，遍路体験記を読むと，男性は遍路を修行とみなす傾向があり，女性は遍路を出会いや自然の美を楽しむ旅とみる傾向がある。同じ遍路道を歩いても男性と女性ではずいぶん異なる経験をしているのである。

これについては次のような証言がある。馬淵公介氏は，男性遍路の場合，「今日わたしは何キロ歩いた」「私は何キロ」といってからでないと宿での会話が始まらないという。男性遍路は歩いた距離のことをとても気にする。これが女性には理解しがたい。馬淵氏によると，ある女性遍路は「男の人って，歩いた距離を誇りたいの？ 誉めてもらいたいの？ それとも距離の優劣を相手と

(4) 湯浅泰雄『湯浅泰雄全集』補巻，ビイング・ネット・プレス，526-534 ページを参照。

比べてからでないとおちつかないの？」と言ったというのである。他方、女性について言えば、女性たちは比較的のんびり遍路を楽しんでいるふうにみえたと述べている⁽⁵⁾。ここに男性と女性のちがいがよく描かれている。もちろん女性でも修行する人はいるし、男性でも自然を愛でる人はいるので、これは男性性と女性性の相違というべきであろう。

男性性・女性性は、対比対立の原型であり⁽⁶⁾、その象徴的表現なので、厳密に定義することはできないが、神学者スウェーデンボルグは、女性性は愛、男性性は知恵であると特徴づけている。そして愛と知恵がひとつになるとき役立ちが生まれるという。男女の結婚には、愛と知恵、善と真理がひとつになるとい⁽⁷⁾う意味があるとされる。

『タオ自然学』で著名なカプラは、歴史的、社会的な視点から、次のような陰陽の対照リストをつくっている。陰は、女性的、収縮的、保守的、反動的、協力的、直感的、統合的であり、陽は、男性的、膨張的、先鋭的、積極的、競合的、合理的、分析的である⁽⁸⁾。われわれの社会は一貫して陰より陽を重視してきた。しかし時代は変わり、これからは陰が重視されなければならない。われわれはそのような大きな歴史のターニングポイントにいる。カプラは以上のような議論を展開している。男性性と女性性はいずれも欠くべからざる要素であるが、現代社会において足りないものは女性性ではないかというのである。

人格形成という視点から男性性と女性性について考察したものでは、ユング派の心理学者 E. ノイマンが深く精緻な洞察を行っている。深層心理学者らしく、男性性と女性性を意識と無意識に対比させている。ノイマンによると、男性性は意識であり、否定し、区別し、分離し、排斥する能力である。女性性は、

(5) 馬淵公介『きょうはお遍路日和』双葉社、2001、159-160 ページ。

(6) エーリッヒ・ノイマン（松代洋一訳）『女性の深層』紀伊國屋書店、1980、15 ページ参照。

(7) エマヌエル・スウェーデンボルグ（長島達也訳）『結婚愛』アルカナ出版、1994。

(8) フリッツォフ・カプラ（吉福伸逸訳）『新ターニングポイント』工作舎、1995、30 ページ。

無意識であり、肯定し、すべてを結びつけ、包み込み、溶かす傾向である⁽⁹⁾。人生の前半期は、男も女も男性的なものにより、自我と意識にいたる道を見いだす。人生の後半期は、女性的なものによって、男性的なもの⁽¹⁰⁾と女性的なものを内に宿す全体性へと突き進むよう強制される。若者に必要なものは男性性であり、中年以降は女性性が必要とされるというのである。

以上のような議論を念頭におきつつ、遍路における男性性と女性性がどのように現れ、どのように働いているかを遍路体験記の叙述の中に見ていきたい。

2. 遍路体験記タイトルにあらわれた男性性と女性性

(1) 男性性

男性的性格の強い遍路といえは、修行としての遍路ということになるであろう。この場合は、心身の鍛錬という遍路の明瞭な目的があり、その実践としての苦行がある。遍路における苦行は長距離歩行や野宿などであり、その過程で、疲労、暑さ、寒さ、雨、風などの諸要素に耐えて心身を鍛錬する。

たとえば青野貴芳氏の遍路は、本の副題にあるように「駆け出し僧侶が歩いた四国八十八カ所」であり、修行遍路である。著者は長距離を歩き、野宿をしている。体験記には「私も、禅僧の端くれとして、一度は行脚を経験しておきたいと思った」と明瞭に遍路の動機が書かれている⁽¹¹⁾。そして悟りや解脱ということばが本文中によく登場する。

森氏の『男は遍路に立ち向かえ』には、自分の心に鞭打ち、豪雨の中を山上の札所に急ぎ登る場面が描かれている。「信じられない。真ッ縦を嵐の中、一時間十分で駆け上がった。人間やればできる。聞き旧した言葉が新鮮に響き、血沸きたつ興奮に襲われた。…雨にけぶって、幻想的な寺の山門を見た瞬間、沸々と喜びがわき出て、涙が出るほどうれしかった」という⁽¹²⁾。また、森氏は野

(9) エーリッヒ・ノイマン (林道義訳) 『意識の起源史』 紀伊國屋書店、1985、492 ページ参照。

(10) エーリッヒ・ノイマン 『女性の深層』 66-67 ページ。

(11) 青野貴芳 『四国巡礼葛藤記』 すずき出版、2004、14 ページ。

(12) 森哲志 『男は遍路に立ち向かえ - 歩き遍路四十二日間の挑戦』、2009、110-111 ページ。

宿遍路をするヨシゾー青年の苦闘を「遍路との闘いはすさまじい。七転八倒の苦行である」と紹介している。ヨシゾー青年は、野宿遍路で山道に迷い、空腹とマムシとクモの巣に悩まされ自暴自棄になってしまった。そこに携帯電話が鳴り、母親から諭され我に返る。彼は、「遍路は自分を見つめ、心を高めるのが目的なのに、自分を見失い、早歩きしてるにすぎなかった。本当にかっこ悪い。速さより何を求めるのかが大切で、人生も同じことってきづかされました」と悟ったという⁽¹³⁾。この遍路体験記には、もちろんお接待を受けたり、心の通う出会いがあったりしたことも書かれているのであるが、著者は、最後は「遍路はやっぱり終わりのない修行の道である」と述べている⁽¹⁴⁾。遍路における女性性も体験しているのであるが、男性性の方が心に残ってこのタイトルになったのであろう。

小林淳宏氏の『定年からは同行二人』にも高知県を歩いているときの修行遍路のくだりがある。「ある遍路体験記では、この辺の道を『その単調さ、変化のなさ、考えようによってはもう拷問に近い』と描写している。しかし、いくら単調だろうが、変化に乏しかろうが、歩くしかない。こうして歩いているうちに土佐に“修行の道場”という名前のついている理由が納得できた。そして修行とは、要するに耐えることなんだな、と自然に思った」と書かれている⁽¹⁵⁾。これもまた、男性的な遍路と言えるであろう。そしてそのような修行によってえられる気づきも、知的なものであり定義上男性性を示すといえるであろう。

遍路における気づきでよく書かれているのは、日常生活のありがたさである。歩き遍路ではとてもお腹が空くので、何を食べてもおいしいし、疲れ果てた体にはお風呂やふとんは最高のぜいたくだと感じられる。あたりまえの生活が、実はありがたいことだったのだと遍路ではじめて気づかされる。ある野宿遍路の青年は、お堂の雑記帳に「屋根の下で寝られることが、こんなに有難いことだとは思わなかった」と書きこんでいた⁽¹⁶⁾。善根宿に泊まった早坂青年も、

(13) 同上、205-206 ページ。

(14) 同上、323 ページ。

(15) 小林淳宏『定年からは同行二人』PHP 文庫、1994、85 ページ。

(16) 青野貴芳、前掲書、22 ページ。

「雨を防いでくれる屋根，風や虫から守ってくれる壁，身体の疲れをそっと吸収してくれる畳。今夜は豪雨が来たってへっちゃらだ。段ボールにくるまる必要もないぞ。寝返りうっても背中がごつごつ痛むこともない。ありがたいなあ。いままでこんなこと，ぜんぜん気付かなかったよ」と記している⁽¹⁷⁾。

それ以外にも，自分は生かされている，「生かされるいのち」に気づいたということもしばしば書かれている。ただし，このような気づきは，多くの場合，お接待や心のもったもてなしなど女性性に触れるところから生まれるものであり，女性性を取り込んだ男性性，あるいは無意識と統合された意識といえるものなので，もっとあとで論じることにはしたい。武田喜治氏は，「遍路では自分一人で長い道のりを歩くので自分と向き合う時間が多くなる，そして自分を客観的に見つめることによって多くのことに気づかされる」と書いている⁽¹⁸⁾。岡島氏も，「遍路を終えた時に，遍路を通して人生を鳥瞰してきたように思えた」と書いている⁽¹⁹⁾。これらは遍路を終えてえられる新たな段階の男性性であり，後であらためて言及したいと思う。

(2) 女性性

遍路体験記を読むと，遍路の男性性より女性性についてはるかに多く言及がなされていることがわかる。遍路における女性性について触れられている内容を以下では紹介していきたい。

(a) 無意識の選択

意識は男性性，無意識は女性性の特徴とされるが，「遍路をはじめた理由ははっきりいえない」「なんとなく遍路に来た」というように，遍路においては無意識の働きが顕著にみられる。その意味で遍路は女性性が強い。遍路動機として修業をあげて歩くお遍路さんがいることは前述したが，そういうはっきり

(17) 早坂隆『僕が遍路になった理由』連合出版，2009，43 ページ。

(18) 武田喜治『四国歩き遍路 気づきと感謝の旅』大法輪閣，2015，6 ページ。

(19) 岡島庸晶『遍路体験記 遍路から得た智慧』リフレ出版，2007，157 ページ。

した遍路動機をもつ人は少ない。多くのお遍路さんが、なぜ遍路をするかという質問に明瞭に答えられないのである。辰野和男氏は「車に脅かされながら、なぜ歩くのか。そんなにいやな思いをしてまでなぜ歩き続けるのか。そう質問されたら、私は返事に困る」と述べている。鎌大師堂庵主になった手束妙絹さんも、遍路動機はよくわからないという。「『どうして遍路を?』ひと月あまりのお四国中に何べんこう聞かれることか、そのたびにどう答えたら納得してくれるか、自身にもよくわからぬものを。…私の場合、この変身(鎌大師堂庵主)の機は何十年かけて、あるいは自分の意識の外の世界から、徐々に成ってきたように思います」と述べている。⁽²⁰⁾

このように遍路は無意識の選択であることが述べられている。青年遍路の早坂氏も同様のことを書いている。「『どうして歩いているの?』いつも僕はこの問いにうまく答えることができない。そしてこの問いは、他人からだけでなく、自分自身の心の内側からも聞こえてくる」⁽²¹⁾。もちろん、多くの人が遍路をするきっかけについて語っている。近親者の死や病氣、失業や職場でのトラブルなど多くは不幸なできごとである。しかし、それらがきっかけであるとしても、なぜ歩くのかとなると判然としない。ふと思いついてという理由で遍路をする人が実は多いのである。

(b) 出会いの楽しみ

一期一会の出会いは旅の楽しみの一つであるが、歩き遍路の場合、そのような出会いの機会がたくさんある。ある女性は「はじめての歩き遍路がとても楽しかったので、車で再度遍路に来たが、出会いがあまりなくて楽しくなかった。だから三度目は歩いています」と語っていた。歩き遍路が歩きにこだわる理由のひとつは、多くの出会いがあるからである。出会いの楽しみは男性遍路も書いているが、とりわけ女性遍路にとって比重が大きいようで、そのほとんどが出会いの喜びについて熱く語っている。人との交流を求める、出会いを楽しむ

(20) 手束妙絹『お遍路でめぐりあった人々』リヨン社、1988、16、198ページ。

(21) 早坂隆、前掲書、56ページ。

ことは、とりわけ女性的なものといえるであろう。

手束妙絹さんは次のように書いている。「お大師様の道を歩いて辿ることは、信心とは別に、言い知れぬ或る情というか、ロマンというか、私にはそれなしには語れない思いがするのである。…会ったり、別れたり、さまざまの人生を歩いている人たちにめぐりあいます。お互い名を告げずとも、遍路宿の一夜の間わず語りに泣きあい、お互いの上を祈りあい拝みあう、そこに相互合掌の姿⁽²²⁾があります」。

もちろん男性遍路にとっても出会いは遍路の大きな楽しみの一つである。早坂青年は68歳の老紳士と出会い同行になる。老紳士は亡くなった妻への供養と、阪神大震災の犠牲者への供養と、戦後50年ということで遍路に出たのだという。いっしょに野宿し、「妻はワシなんかにはもったいないくらいの女でした」といった昔話を聞く。足を痛めた老紳士とは別れるときがくるが、「『あなたみたいな若い友達ができて嬉しかった。これからのあなたの旅がすばらしいものになるよう、祈ってますよ』そう言って握手を求めた。ほくの頬に思わず涙がこぼれた」と書いている⁽²³⁾。これに類する話が体験記にたくさん書かれている。

すばらしい出会いをしたお遍路さんの記述をもう一つ紹介したい。吉田哲朗氏は、「遍路の旅は人の心の美しさに触れる旅でした。…遍路の間にいただいた温かいお接待に報いるためにも、大きな心をもって人に接していきたくと思っています⁽²⁴⁾」と書いている。遍路が「人の心の美しさに触れる旅」であるとは言えて妙というべきである。お接待は見返りを求めない行為であるが、遍路ではそのような美しい行為にたくさん出会うからこそこのような表現がでてくるのであろう。

(22) 手束妙絹『人生は路上にあり』愛媛県文化振興財団, 1988, 6ページ。

(23) 早坂隆, 前掲書, 112ページ。

(24) 吉田哲朗『ぐうたらじじいのお遍路日記』2004, 268ページ。

(c) 家族の絆

こどもの病氣平癒を願って母親が遍路をするということがある。これは母性愛による行為であり、遍路の女性性を示す事例といえよう。

早坂氏は、四国をすでに20回まわっているという40代の「オジサン」に出会った経験を紹介している。この「オジサン」は、幼いとき病気で死にかけた。母親が病気が治るようと八十八カ所を歩いた。そのおかげかどうか、病氣は治った。小さい頃からその話を聞かされていたので、いつか自分も遍路をしてみたいと思うようになった。高校生のときはじめて歩いて感動した。オジサンは「この道を昔、母が歩いたんだ、病氣の自分のために歩いたんだ、それと同じ道をワシは今歩いているんだ、そう思うと胸がつまりそうになったもんだよ」と語る。そして大学生になっても、社会人になっても遍路をした。結婚して大事件があった。生まれた長男に障害があった。ショックをうけ、絶望した。そして、それからは、その子どものために歩くようになった。「かつてワシの母親がワシのために歩いた道を、今度はワシが自分の子供のために歩く。この道はな、ワシにとってそういう場所なんだ」オジサンはそう語る。⁽²⁵⁾このように、母性的な情愛による遍路も少なからずあるようだ。

古い明治時代の事例であるが、後に高野山真言宗管長になった和田性海が、青年時代に遍路をした記録があり、その中に「足摺山の一夜」と題して、ハンセン病の幼子二人を連れた母親に遭遇した日のことが書かれている。「その夜僕等は寺の客殿で十時頃枕に就いたが、半夜フト眼が醒めると、大師堂の縁で、一心不乱にご宝号を称えて居る声がする。聴き耳を立てると、今日連れになった母親が、二人の子を宿に寝させておいて、一人夜を通して祈って居るのである。遠く響く濤の音と、吹き荒ぶ山風とに和して何とも知れぬ悲痛を感じさせる。禾山も僕もともに覚へず起き直った。禾山が観音経の偈を唱えて、僕が之に和した。こちらも夜を通して繰り返し々々念誦したが、彼の母はいつ迄も祈りつゞけて、夜明け近くまで止むことを知らぬのである」。⁽²⁶⁾これは和田にとっ

(25) 早坂隆、前掲書、194-197ページ。

(26) 和田性海『聖跡を慕うて』高野山出版社、1951、77-80ページ。

て遍路におけるもっとも衝撃的な出来事であつたらしい。数多くの歌を残している。

さらに、筆者が結願寺近くの遍路宿のノートで見た事例には次のようなことが書かれてあつた。こどもが大病して障害が残つたことをきっかけに家族で車遍路を始めた。毎週末、和歌山から家族で車に乗って四国に来た。霊場では父親が長男を背負って本堂と大師堂に連れていき、弟と妹もそれぞれに荷物を運ぶ担当を決めてお参りを続けた。そして9年かけて結願した。その結願の日に、母親は「遍路とは家族がひとつになることだった」と記した。ここにも家族愛による遍路の形がある。こどもの病氣平癒を願つての遍路であつたようであるが、母親はむしろこどもへの愛情そのものに価値があることに気づかされている。

(d) 夫 婦 愛

遍路は同行二人、すなわち弘法大師と二人連れ、つまりは一人で歩くものだというイメージが強いが、夫婦による遍路体験記がかなりみられるのはやや意外である。タイトルをあげると以下のようなようになる。

『お遍路は大師さまと三人旅－歩いて見つけた夫婦の絆』

『空と海と風と－夫婦で愉しむ道草遍路』

『夫婦で行く素晴らしき歩き遍路－自分探しの夫婦お遍路さん体験記』

『夫婦で歩く遍路道』

『夫婦お遍路』

『夫婦遍路紀行』

『風と歩いた夫婦の四国遍路』

『二百万歩のほとけ道－熟年夫婦が歩いた四国遍路』

これらの体験記の本文では、とくに夫婦関係のあり方について語られるということはあまりなく、多くの場合、一人とする遍路体験記と同様の遍路での出

来事が淡々と書かれている。ただ夫婦遍路の著者たちは四国遍路の体験を夫婦で共有するところに価値を見出しているようである。

『お遍路は大師さまと三人旅－歩いて見つけた夫婦の絆』の財津定行氏は、50代半ばでこれからの人生をじっくり考えたいと、会社をやめて遍路に出たいと妻に言ったところ、反対されず、逆に「私も勤めをやめていっしょに行きたい」と言われたという。「いろいろ考え検討した末に、私一人の遍路より、二人一緒に行くことで夫婦として、お互いのこれからの人生の歩き方を考えるのも大事なこともかもしれない。それに第一、一緒だと安心である。五十日に及ぶ遍路を二人で体験し、寝食を共にし、苦楽を味わうことは、年老いて行く私たち夫婦にとって、この遍路がこれからの生きる絆になるかもしれない」と夫婦遍路が始まったと述べている。遍路体験記の末尾には、「私たち夫婦にとって、四十九日間のすべて寝食を共にしたことで、お互いの理解が深まり、これからのありようがわかった気がする」と書かれている⁽²⁷⁾。

(e) お 接 待

お遍路さんが四国でもっとも衝撃を受けるのがお接待である。見知らぬ人から食べ物やお金をもらうことは、日常生活ではまずないことである。お接待は、遍路を非日常世界にする大きな要素だと思われる。お接待があるから四国は慈悲の世界というイメージができる。多くの体験談の一例を示すと、山勝三氏は、日和佐でおにぎりをもらったので、「頃合いの場所をみつけて食べた。作った人の心の温かさがジーンと伝わり、思わず涙が出そうになる」と書いている⁽²⁸⁾。お接待の食べ物を涙を流しながら食べるというのは、多くのお遍路さんが経験することである。馬淵公介氏は、若者がくれたお接待のジュースを飲んだときのことを次のように述べている。「突然、何がどうしたのかわからないが、これまで経験したこともないような大粒の涙が溢れてきた。どうしたんだ、

(27) 財津定行『お遍路は大師さまと三人旅－歩いて見つけた夫婦の絆』リヨン社、2000、238ページ。

(28) 山勝三『二百万歩のほとけ道－熟年夫婦が歩いた四国遍路』文芸社、2012、52ページ。

なんなんだこれは。だがその大粒の涙は、あとからあとから溢れてきてとまらない⁽²⁹⁾」。

(f) 遍路でやさしい人間になる

遍路をするとやさしい人間になったということがしばしば語られているので紹介しておきたい。お接待を受けたからということも一因であるようである。佐藤孝子氏は、外人のお遍路さんとの会話を次のように書きとめている。「『四国の人は優しい。彼らはみな心のうちでお大師様と出会っているから優しいのだ』私は言った。『四国の人は優しい。とても親切だ』彼も大きくなずいた。10月に35番清滝寺まで巡ったという彼も、あちこちで助けられ、親切を受けたのであろう⁽³⁰⁾」。お接待だけでなく、さまざまな親切を受けて、お遍路さんはやさしい気持ちになるようである。

福島明子氏はそのようなやさしい男性に出会ったときのことを紹介している。彼女は、夫婦で歩いているお遍路さんに出会った。夫が実にやさしい人に見えるが、妻の話を聞くと実は昔はそうではなかったという。かつて夫の吉次さんは、家庭でも会社でも他人を認めようとしなかった。「厳しかった。鬼と言われた。若い人の前でいばった」。…ところが、吉次さんは45歳以降、徐々に人間が変わっていった。60歳で遍路を歩き始めるとさらに変わったという。妻の多美子さんは語る。「若い頃から見たらすごいやっぱり変わった。優しくなった。子どもたちがちいさいときこうだったらよかったのって思う⁽³¹⁾こともある」。

加藤弘昭氏は、遍路の意味はやさしい人間になることだという。「私は旅の途中で、見知らぬ方々から思いもよらぬ温かい接待や励ましに元気づけられながら、何とか満願成就できたことに自信と誇りを持っている。相手は気づいていないかもしれないが、他人に対する接し方は優しくなったつもりであるし、

(29) 馬淵公介、前掲書、247ページ。

(30) 佐藤孝子『お二百まん穂の遍路に咲く花通る風－元気おばさんお四国を歩く－』リヨン社、1997、75-76ページ。

(31) 福島明子『大師の懐を歩く』風間書房、2004、249ページ。

家族にたいしては今まで以上に思いやりを持つようになったと思っている」と書いて⁽³²⁾いる。

(g) 癒 し

近親者を亡くすなどの不幸に見舞われた人が、意識的、無意識的に癒しを求めて遍路をすることがある。がん専門医の垣添忠生氏は、妻を亡くした後、悲しみから立ち直るための積極的活動を行った。グリーン・ワークである。そうして1年がかりでようやく見かけ上、普通の社会生活が送れるようになったという。そして、妻の死から7年後、深い心の底の悲しみを癒すために四国遍路⁽³³⁾に出た。

巡礼の目的には「妻の鎮魂、慰霊」のためということもあったが、実際に巡礼を始めると、実は妻に対する「感謝」の旅であることに気づいたという。悲しみについていえば、それは決してなくなるというわけではなかった。むしろ「遍路中もずっと通奏低音のようについて廻ったのが『悲しみ』だった」とい⁽³⁴⁾う。したがって、垣添氏にとっての「悲しみ」の問題解決は、それにプラスの意味を見出すことであった。これについて垣添氏は、「悲しみの考察」という一節を設けて次のように述べている。「よほど親しくならないと、容易には口にはできない悲しみや苦しみを抱いて、じっとそれに耐えて生きている人が、世の中には実はかなりおられるのではないだろうか？ 考えてみると、そうした世の中を生きていく上ですぐれた能力を持った人も、『悲しみ』を経ることによって、人格に一層深みが増し、他者の悲しみや苦しみに対する包容力も大きくなるのではないか？ 『苦み』が味覚の中で、もっとも微妙で深みがある感覚といわれるように、『悲しみ』は人生につきまとう一種のスパイスのようなものかもしれない⁽³⁵⁾。悲しみがなくなるわけではないが、それに意味を見出し、それを受け入れることができるようになるという形で遍路における癒しがある

(32) 加藤弘昭『四国108カ所遍路旅』新風社、2005、301ページ。

(33) 垣添忠生『巡礼日記－亡き妻と歩いた600キロ』中央公論社、2016、13ページ。

(34) 同上、21ページ。

(35) 同上、146-147ページ。

ようである。

『へんろ長調のぼり坂』の高久ひとし氏の遍路も癒しの遍路だったといえる。50歳で突然妻を亡くした高久氏は、四十九日を終えるとふと「供養」という言葉が浮かんで、四国遍路を思いついた。「これで何かが変わるとは期待できなかった。ただ八十八カ所という響きのいい数字が何かにつかまっていたがっている私の心を捉えていた」という⁽³⁶⁾。しかし、実際に歩いてみると、「四国歩きは亡くなった人のための供養では決してないと感じた。…本当は生き残った側の魂を鎮めるレクイエム、生き残ったものを応援するエールの旅である」と感じたという⁽³⁷⁾。本文中には、遍路で著者が考えたことが紹介されているが、その中に『葉っぱのフレディ』から、「死ぬというのも、変わる一つののだよ。いのちというのは永遠に生きているのだ」という引用がなされている⁽³⁸⁾。あとがきには、子どもたちの成長のことに触れ、「次の世代が着実に築かれていく。その予感がとてもうれしい」と書かれている。『へんろ長調のぼり坂』というタイトルからも、遍路をとおして妻の死という不幸を受け入れ、立ち直っていく姿が思い浮かぶ。遍路には癒しの力があることが遍路をした人たちによって述べられている。

以上みてきたように、遍路における男性性と女性性が見られるのであるが、遍路体験記に多く記されているのは遍路の女性性である。厳しさよりはやさしさ、修行よりは癒しが語られることが多いし、それだけお遍路さんの心に残っているということだろうと思う。修行の遍路はもちろんあるわけであるが、それは修行のための道場のようなところで決められたことをするような修行ではなく、実生活に近いところで一般の人と触れ合いながらする修行であり、やさしさを感じる機会が多いのだと思う。もちろんやさしければよしというわけではなく、遍路ころがしのような厳しさも必要な要素であり、両者が相まって人

(36) 高久ひとし『へんろ長調のぼり坂』文芸社、2005、9ページ。

(37) 同上、45ページ。

(38) 同上、49ページ。

間形成に資するようなものであるところに遍路が今日まで続いてきた理由があるのではないかと思う。そこで、次章では男性性と女性性の統合の実例を見ていきたいと思う。

3. 男性性と女性性の統合

「お遍路のだれもがもてる不仕合わせ」（森白象）という句があるように、遍路は何らかの人生の課題を抱えた人がする心の旅という性格を強くもっている。ただし、遍路体験記にそのような試練と再生の過程が詳しく書かれているものもあるし、あまり触れられていないものもある。そうした中で、遍路をして心境の変化があったというお遍路さんの体験記のいくつかを紹介してみたい。

最初に取り上げるのは、不登校児が遍路を実践して立ち直ったという事例である。岡田光永氏は15歳で歩き遍路をした記録を残している。彼は不登校児であった。不登校になった理由は、彼の言葉によると「中学校の規則が窮屈だったのと単純な勉強嫌いだった」。「昼頃まで寝て、なんとなく外出して、遅くなるまで遊んで、遊び疲れたら帰って寝る。そのくり返し。けれどどこか単調だった。なにかがものたりない」といった毎日であった⁽³⁹⁾。それが停滞感を生み、焦り、不安になり、結局学校に戻る決心につながった。そして学校に戻った年の夏休みに、親の勧めもあって遍路に行くことになった。遍路に出て、お接待を受けたり、遍路仲間や地元の人との出会いがあったり、暴風雨の中を歩いて叱られたりしながら57日間の旅を終えて、大切なものを見つけることができたという。「僕は将来、教師になりたいと思っている。どんなに時代が変わっても、僕と同じように、学校に行くことへの意味を見つけられずに悩む子供は絶対にいるだろう。そんな子供たちの支えとなっていきたいと思うのだ。自分が体験したからこそ、本当に中身のあることが伝えられると思うから。これまでの僕は人と真正面から向き合うのが恐かったが、今回の八十八カ所巡礼を通して、人と接することの素晴らしさを学んだ。さまざまな人との出会い

(39) 岡田光永『15歳のお遍路－元不登校児が歩いた四国八十八カ所』廣済堂、2005、17ページ。

が、自分を大人にしていくのだということも」⁽⁴⁰⁾と書いている。思春期只中の岡田氏にとっては、自我の確立、男性性を身につけることが必要であったと思われるが、まさに遍路を通して強い精神力を獲得したことがうかがえる。そして人と接することの素晴らしさを味わい、さらには自分が学んだことを、同じように悩むであろう次の世代に伝えていきたいと思うまでになった。本書は、遍路をすることで男性性と女性性を獲得し、人間的成長を遂げた少年の記録である。彼はその後、大学に進学し自転車⁽⁴¹⁾で日本一周している。そして、最終的に教師になる夢を実現したらしい。

安田あつ子『お父さんと一緒に四国遍路』も、遍路によって人間的成長をした過程がよく描かれている。著者の安田あつ子さんの夫は、大型トラックによる玉突き事故に巻き込まれ35歳で亡くなった。あとには著者と小学2年の息子と2歳の娘が残された。無力感に打ちひしがれる日々が続いたが、3年後、著者は2人の子どもを連れて遍路を始めた。遍路動機が次のように書かれている。「子供達を一人前に育てること、懸命に生きる姿を夫に見てもらふことこそが一番の供養だということは、夫の人柄を思えば言うまでもないことなのに、そう簡単に割り切れず、どんなに読経しても、綺麗な花を捧げても、夫の好物を供えても、墓前に日参していても、所詮、直には何もしてあげられないという自責と無力感が私の中で膨らんで行ったのです。『もっと他に出来ることはないだろうか』思い悩んだ末、発意したのが四国遍路を巡礼すること⁽⁴²⁾」。親子3人の2年4か月にわたる区切り打ち遍路だった。遍路を振り返って、彼女は「四国遍路は人生そのものだった。難行苦行どころか、体と心に栄養を頂き、人生の縮図を見聞出来る素晴らしい『学び舎』だった」と感想を述べている。そして「長いアスファルト、ゴロゴロの山道、悪天候や炎天に、私達は鍛えられたと共に、お四国の人々と大自然に触れながら、救われ、癒されて行った。そして、人、動物、植物、太陽、水、空気…周りにある無限の恵み

(40) 岡田光永、前掲書、221-222 ページ。

(41) 岡田光永『20歳の「自転車日本一周」』廣済堂、2011。

(42) 安田あつ子『お父さんと一緒に四国遍路』文芸社、2008、5-6 ページ。

(43) 同上、225 ページ。

に支えられ、教えられ、育てられながら、生きさせて頂いていることを実感した」という。⁽⁴⁴⁾ 遍路をとおして、強さとやさしさを両方身につけることができた⁽⁴⁵⁾と述べているのである。そして「自分の非力も省みず、自力で生きようと本気で思っていた私は、何て傲慢だったことか。…『自力』で生きようなどと意地を張らず、『他力』によって生かされている感謝を忘れずに、笑顔で生きていく」という生き方を遍路から教えられたという。⁽⁴⁵⁾

不幸が襲っても、遍路をすることでそれを乗り越え、明るく生きていくという話は、遍路体験記の古典的著作『娘巡礼記』にも描かれている。わが国の女性史学の草分けとして著名な高群逸枝は、娘時代、四国遍路をした。『娘巡礼記』には遍路動機は自分にも分からないと書いているが、極端に感激したり、懊悩したり、泣いたりするという不安定な心の状態があったという。⁽⁴⁶⁾ 後年の著作では、当時、脚気にかかり、神経衰弱におかされ、また恋愛し、婚約したものの、自分は結婚する資格のある人間かどうかの迷いがあったと書いている。高群は遍路を振り返って次のように述べている。「八十八カ所の道には、ずいぶん険しいところもあったが、私はめげなかった。どんな處もさけることはなかった。ここでは多くの遍路といっしょになったが、私は完全に、それらの人達と同化した。私はここで何ものをも求めず、来る運命に身をうちまかせる生活を知った」。彼女が遍路からえたものは、「運命にまかせるところに、安心の境地をもつ」という生き方だった。⁽⁴⁷⁾ 遍路を終えた直後の彼女のことばによれば、「飛ぶものは飛べ、去るものは去れ。流れんと欲さば流れよ、消えんと欲さば消えよ。何事もただそのままに—」である。⁽⁴⁸⁾ ここにも何ごとにも動じない穏やかさと強さを兼ね備えた心を見出すことができる。彼女は遍路について次のように言う。「私は、生活に行きづまりを感じ、物ごとに確信を失うごとに、きまって遍路を思う。…人の世のどんな不幸でも、あの道を辿る間には、心次第

(44) 同上、226 ページ。

(45) 同上、227 ページ。

(46) 高群逸枝『娘巡礼記』岩波書店、2004、15 ページ。

(47) 高群逸枝『遍路と人生』厚生閣、1938、13-14 ページ。

(48) 高群逸枝『娘巡礼記』295 ページ。

で、大概はいやされるという気が私にはするのである。不幸な人は遍路にでなさい。私は心からこういって、すすめたいのである⁽⁴⁹⁾」。高群の遍路は一度だけだったが、その体験は心の中で生涯生きた。

高群のいう「何ものをも求めず、来る運命に身をうちまかせる生活」に近い心境はいろいろな体験記に書かれている。佐藤孝子氏は、少々のことでは喜怒哀楽の感情が動かなくなったというが、これも高群の言葉に近いのではないだろうか。佐藤氏は、お遍路で一日41キロを歩かなくてはならないことがわかって「ふーん、41キロを歩くのか」と思うだけで「うへー」とも「歩けるのか」とも思わないということがあった⁽⁵⁰⁾という。人に多少批判じみたことを言われても怒りのきもちが出てこない。「鈍くなったと言えば言える。あるいは、自分で気がつかないうちに、どこかが変わってきていて『とても勁（つよ）くなっている』とも考えられる。…遍路道を歩くことで、私の水面下も変質しているのかもしれない」「こんな鈍気味の私、ちょっと不思議で不気味だが、決していやではない。慣れたら以前の自分より好きになれそう。『鈍牛』って好きだ」と述べている⁽⁵¹⁾。何があっても平常心で心が乱れないということらしい。

垣添氏の心境も同様である。前述したように、垣添氏は妻の死という消えない悲しみを消し去ろうとするのではなく、「悲しみを経ることによって人生に深みが増す」あるいは「悲しみは人生につきまとうスパイスのようなもの」と考えて、あるがままを受け入れようとしている。これも高群のこぼれに通じるものがある。

『男は遍路に立ち向かえ』の著者も、讃岐の道場に来たときに、同様の心境になったことを書いている。「普段の生活を思い浮かべる。これがうまくいかない。あれは嫌だ。これは、つまらない。あいつはいいけど、こっちはこうだ。あんな風にやれたらいいのにと感情が揺れる。表立って反応しなくとも、心の

(49) 高群逸枝『遍路と人生』19ページ。

(50) 佐藤孝子『お遍路に咲く花通る風』リヨン社、1997、211ページ。

(51) 佐藤孝子、前掲書、214ページ。

奥がさぎ波だつ。いらつき、ふさぎ込み、喜怒哀楽に振り回される。今、そうしたことがない。不思議である。歩きながらだつて、嫌なことは無数にある。足が痛ければ、山道など上りたくはない。毎日なにかしら面白くないことはある。しかし、感情がゆれない。気持ちが波打たない。平然としていられる。わが人生の大いなる発見だ⁽⁵²⁾」。

お遍路を実践することで、どんな人生の困難に直面しても平常心を失わない人間になるというと理想的すぎるかもしれないが、遍路体験記をみるとそういう方向性は見出せるのではないだろうか。お四国病といわれるほど四国を巡っている人であれば、そのような方向にいつそみがかかっているのかもしれないが、それを実証しようとしても、そのように何度も四国を巡っている人の体験記は意外に少ない。四国遍路十数回の手束妙絹さんの本があるが、それ以外では、近藤優『四国遍路托鉢野宿旅』が、幾度も遍路を重ねているお遍路さんの体験記である。

近藤優氏は四国霊場会公認の先達であり、修行として四国遍路を行っている。托鉢野宿の遍路をするにあたって、「善い事があればお大師様のお恵みと思い、そうでない時は戒めと解釈し、何事も有り難いと受けとめることにしました」と心構えを述べている。近藤氏によると、托鉢野宿遍路はきびしい修業の連続である。「一日中、同行二人の気持ちは弛むことなく、厳しい修行の旅の連続であり、雑念など浮かぶ余地はありません⁽⁵³⁾」。とはいえ、善根宿に恵まれることもあった。「奥さんやお婆さんと何時間も楽しく対談し、新しい綺麗な布団で寝させてもらい、人の情けの温かさと布団の暖かさに感激し、熱いものが頬を伝わり落ちました。…人の情けと試練の野宿、私には両方とも有り難いこととあります⁽⁵⁴⁾」と書いている。近藤氏によると、遍路ではきびしさとやさしさ両方について学ぶのである。ただ近藤氏の遍路が他の新参お遍路さんと違うところは、実に軽い調子で修行をしているようすである。「帰宅すると家内

(52) 森哲志、前掲書、286-287 ページ。

(53) 近藤優『四国遍路托鉢野宿旅』文芸社、2004、4 ページ。

(54) 同上、119 ページ。

という、小大師おだいしさんがにっこり笑い、『お遍路さん、お帰りなさい、長き旅、ご苦労さまでした』この言葉、この笑顔がとてもとても嬉しかったのです。四国の遍路道も、高野山も、我が家も我が心も日本晴れでした。ありがとうございました。このように修行とはいえ、ユーモラスなことばで体験記を締めくくっている。善い事を自分の功績にせず、そうでないときも過度に落胆することなく、平常心を心がけるようすがよく描かれている。

4. ま と め

現代社会が過剰に男性性を求められる世界であるとする、遍路には男性性と女性性の両方があり、その意味で遍路は、日常世界と比較すると格段に女性的なものが存在する世界である。お接待、一期一会の出会い、癒し、無意識の世界の発見などは、日常の社会生活でなかなか体験できないものである。体験記でよく「気づき」に言及されるのも、そうした女性性を経験する機会が多くあるからだと思われる。

武田喜治氏は、とりわけそのことを指摘している。「お遍路の旅は『気づきの旅』である。健康のありがたさに気づく。生かされて生きていることに気づく。足ることの大切さに気づく。感謝することの大切さに気づく。雄大な自然に比べて自分がいかに小さな存在であるかに気づくというように」と述べている⁽⁵⁵⁾。武田氏は、遍路体験がこのような感謝、謙遜、少欲知足の大切さに気づかせるというのである。

現代のわれわれは、社会生活において、挑戦、勝利、成功など男性性を求められることが多いので、それがうまくいかないと強い挫折感や敗北感を感じる。強さは必要であるが、強さだけでは対処できないことがしばしば起きるのが人生であろう。遍路には男性性のみではない、それとは異なる価値観もある。誰にも頼らず生きていかななくてはと思い詰めていた安田あつ子氏が、『他力』によって生かされている感謝を忘れずに、笑顔で生きていく」と思うように

(55) 武田喜治、前掲書、256-257 ページ。

なったのも、遍路で女性性に触れて気づいた結果と言えるし、高久ひとし氏が『葉っぱのフレディ』の一節を思い起こし、平常心を取り戻しつつあると述べているのも同様の気づきの結果であろう。筆者はある遍路宿のノートに、「今まで自分が妻子を養ってきたとあってきたが、実は妻に支えられて生きてこられた人生だったことに気づいた」と書かれていたのを読んだことがある。遍路でこのような気づきをした人は、新たな価値観をもって、より柔軟に実社会の人生を歩んでいくのであろう。お遍路さんは、遍路で様々な体験をすることで、男性性と女性性の調和のとれた心を取り戻しているように思われる。

引用文献

- 青野貴芳『四国巡礼葛藤記』すずき出版、2004
- 大賀睦夫「四国遍路体験記のリスト作成とタイトル分析」『香川大学経済論叢』第89巻第4号、2017
- 大賀睦夫『四国遍路の再生プロセス』『香川大学経済論叢』第87巻第3・4号、2015
- 岡島庸晶『遍路体験記 遍路から得た智慧』リフレ出版、2007
- 岡田光永『15歳のお遍路－元不登校児が歩いた四国八十八カ所』廣濟堂、2005
- 岡田光永『20歳の「自転車日本一周」』廣濟堂、2011
- 垣添忠生『巡礼日記－亡き妻と歩いた600キロ』中央公論社、2016
- 加藤弘昭『四国108カ所遍路旅』新風舎、2005
- カブラ、フリッチョフ（吉福伸逸訳）『新ターニングポイント』工作舎、1995
- 小林淳宏『定年からは同行二人』PHP文庫、1994
- 近藤優『四国遍路托鉢野宿旅』文芸社、2004
- 財津定行『お遍路は大師さまと三人旅－歩いて見つけた夫婦の絆』リヨン社、2000
- 佐藤孝子『お二百万穂の遍路に咲く花通る風－元気おばさんお四国を歩く－』リヨン社、1997
- スウェーデンボルグ、エマヌエル（長島達也訳）『結婚愛』アルカナ出版、1994
- 高久ひとし『へんろ長調のぼり坂』文芸社、2005
- 高群逸枝『遍路と人生』厚生閣、1938
- 高群逸枝『娘巡礼記』岩波書店、2004
- 武田喜治『四国歩き遍路 気づきと感謝の旅』大法輪閣、2015
- 辰野和男『四国遍路』岩波書店、2001
- 手束妙絹『お遍路でめぐりあった人々』リヨン社、1988
- 手束妙絹『人生は路上にあり』愛媛県文化振興財団、1988

- ノイマン, エーリッヒ (林道義訳) 『意識の起源史』 紀伊國屋書店, 1985
- ノイマン, エーリッヒ (松代洋一訳) 『女性の深層』 紀伊國屋書店, 1980
- 早坂隆 『僕が遍路になった理由』 連合出版, 2009
- 福島明子 『大師の懐を歩く』 風間書房, 2004
- 馬淵公介 『きょうはお遍路日和』 双葉社, 2001
- 森哲志 『男は遍路に立ち向かえー歩き遍路四十二日間の挑戦』 長崎出版, 2009
- 安田あつ子 『お父さんと一緒に四国遍路』 文芸社, 2008
- 山勝三 『二百万歩のほとけ道ー熟年夫婦が歩いた四国遍路』 文芸社, 2012
- 湯浅泰雄 『湯浅泰雄全集』 補巻, ビイグ・ネット・プレス, 2013
- 吉田哲朗 『ぐうたらじじいのお遍路日記』 熊本日日新聞, 2004
- 和田性海 『聖跡を慕うて』 高野山出版社, 1951